
涙 と 恋 と

NANA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙と恋と

【Nコード】

N4415J

【作者名】

NANA

【あらすじ】

「秋」と友達の関係の微妙な変化と人間関係のお話。

庄君が好きだった秋は、失恋をし、また新しい恋へ目覚める。

プロローグ

彼が幸せなのなら、それで良かった。

あの子が幸せなのならそれで良かった。

私はどうなったっていい。

あの子の幸せ、彼の幸せが

私の幸せなんだから。

「…っ」

ここは、私の部屋。

そして、ベッドの上。

なぜ泣いているかというと…

そう、失恋。

私が好きになった人は友達が好きだった
その事実を知った私はただ、「おめでとう」が
精一杯だった。

今までで一番の大きな恋愛。

その分一番大きな失恋。

その日の夜

私はベットに突っ伏して泣いた。

プロローグ（後書き）

こんにちは。

NANAです。

恋愛には慣れていないのですが…
精一杯がんばります。

失恋

わたしは千草^{ちくさ} 秋^{あき}。
中学生。

失恋した理由は、

一昨日のある出来事がきっかけとなったのだった。

私の好きだった彼・月野 庄君は、
同い年。よく喋ったりしていた。

そして、私の友達の椎野 るい。

この子とは仲が良くて、いつも一緒にしゃべっていた

今は部活の発表会の準備期間。

私とると、最年長の明野 柚歩先輩で準備を進める。

3人で喋っていたときだった。

る「ねえ、私、庄君に告白されました!!」

秋・柚「ええ〜っ!!」

柚「本当か!？」

る「はい!なんかメールで……」

その後の言葉は頭をあっという間にすりぬけた

失恋決定。

失恋（後書き）

NANAです。

あいかわらず駄文ですいません；

感想お待ちしております！

心の傷（前書き）

第二話の直後です。

心の傷

頬を伝って涙が流れおちた。

そばにいた2人はビツクリして私を見る

柚・る「「どうした!?!」」

そのまま、シヨックのあまり私は気絶してしまっただ…

やっぱりシヨックだった。

ちよっと耐えられなかった。

「「…ち…さ…ちく…さ…ちくさ…千草!」」

「…き…あ…き…あき…秋!」

誰かが私の名前を呼ぶ。

光が目差し込み、徐々に誰だかわかってくる。

そう。 るいと庄君、そして同じくクラスメイトの昇田 慄君だ。

「秋!!よかつた〜!目を覚ましたんだ!!」

「「」は…?」

「保健室だ!!!倒れた時俺と慄がたまたま通りかかってな。

慄、一人でお前を運んだんだぜ!？」

「なっ…ちよつと!」

「慄君が…?そう、ありがとう!」

「いや、その…」

「んじゃ、おれらは戻るぜ。慄付いてやりなよ。」

「「え…」」

2人が保健室を出ると、急に静かになった。

沈黙を破ったのは慄君。

「な、なあ。なんでいきなり倒れたりしたんだ?」

「…っ」

あの事を思い出して泣けてきた。

「あ、俺、何か悪い事言ったか?言わなくてもいいけど…」

「ううん…聞いてくれる…?」

彼はゆっくりうなずいてくれた。

新たな鼓動

（部室までの廊下）

る「ねえ、庄君。なんであの二人をわざわざ2人つきりにしたの？」

庄「ハア…まだわかんねえのか？自分の恋愛にも他人の恋愛にも鈍いよな、おまえつて。」

る「え…あ！！そっか！」

（気持ち、伝えてこいよ…慄。）

（保健室）

私は涙ながらにその日の事を語りだした。

庄君の事が好きだった事。

その庄君がるいの事を好きだったって事。

慄君は全てを聞いてくれた。

そして私が全てを話し終わったとき、やっと彼は口を開いた。

慄「…庄が、うらやましいな。」

秋「え、なんで？」

慄「おまえに、そんなに想われてさ」

秋「そう…かな」

慄「なあ…俺の事も、聞いてくれるか？」

わたしはゆっくりうなずいた。

慄「俺の好きな人は、なんか涙もろくて、妙に明るくて、友達思いのお人好しのいいやつでさ…そいつは庄の事が好きだったらしくて、それを知った時はやっぱりシヨックだった。でもそいつは庄にふられて…」

秋「へえ、叶うといいわね！」

慄「ハア…鈍いな、おまえは。まだ続きがあるんだよ。」

秋「へ？」

慄「そして…今俺の前にいる奴だよ。」

秋「え……」

慄「ごめんな、変な話して。俺、部室戻るから。」

静寂が保健室に戻った。

イヴの日に

あれから1週間が経った。

今日はクリスマス・イヴだ。

慄君とはほとんど喋っていない。

…というよりも話そうと思っても、

両者が顔が赤くなるため、話せないでいるのだ

おかげで関係がぎくしゃくしているため、

ここ1週間、私達を見た柚歩先輩や友達の帆乃の頭に？が浮かんで
いた。

ただ、事情を知っている庄君とるいだけは静かに微笑んでいた。

この日は冬休みの期間だったので1日練習だった部活も終わり、

今は下駄箱でお母さんの迎えを待つ。

るいも庄君も、帆乃も帰ってしまつて、慄君と私の2人きりになつ
てしまつた。

私は顔が赤い事を慄君に悟られないように

白いマフラーで隠した。

慄君は同じく顔を赤くし、頭をかいていた。

沈黙が流れる。

先に口を開いたのは慄君。

私の隣に座つた。

慄「なあ……」

秋「なあに？」

慄「こないだはあんな話してごめんな。」

秋「ううん！嬉しかったよ。」

慄「そうか……あ、あのさ、返……」

そこでタイミング悪く慄君の車が迎えに来る。

慄「あ……またな……！」

秋「うん！また明日ね。」

慄「そうだ……忘れ物。」

私の頬に暖かい感触がはしる。

慄「……じゃあな……！」

秋「……うん……！」

同い年のサンタクロースからもらったプレゼントは
最高のクリスマスプレゼントだよ ……

その直後、私の車が来た。

「心の中で呟いた。」

「Merry Christmas!」

H a p p y B i r t h d a y F o r

今日は12月26日

秋の誕生日。

朝から「おめでとう」といわれ続けた

そんな日の帰り。

慄「な、なあ」

秋「ん？」

慄「お前、チャリだろ。その…一緒に帰らねえか？」

秋「へ…？う、うん。」

~~~~~

秋「で？」

慄「ん？」

秋「こつやって誘ったからには、何か魂胆があるんじゃない？」

慄「ははっ…っやっぱお前はだませねえな」

秋「やっぱり…」

慄「ほら。誕生日プレゼント。」

秋「う…わあ…ありがとう！大切にするね！」

中身は鍵の形をした、ルビーと金の装飾のブローチ。

秋はブローチを手に取り、しげしげと眺めていた

慄「なつ…なあ。」

秋「へ？」

顔を上げた瞬間だった。

2人の影は1つになる

慄「これがホントのプレゼント。happy birthday、千草。じゃあな！」

後には顔を真っ赤にした秋がいた。

## 秋の過去

慄「…おつかしいなあ…あいつ、昨日はあんなに元気にしてたのに」  
る「そうねえ…どこか具合でも悪いのかしら」

キーンコーンカーンコーン…

4限目の始業を知らせるチャイムが鳴り響く。

今日は月曜日。秋は休みだった。

慄（終わったたらあいつの家行ってみるか…今日は部活も休みだし）

（昨日）

秋「あ、慄君！」

慄「ん、一緒に帰ろうぜ」

秋「うん！今日は…あ…」

2人の目の前には正面衝突した車。

たくさんのパトカー、消防車。そして街中だけあってたくさんの人々。

火は完全に消えているものの、車は2台とも完全にひしゃげてしまっている

そばには泣いている三歳位の女の子がいた

慄「あゝ…事故ってる…あれ、どうした？」

秋は完全に血の気の引いた顔をしていた

慄「千草？」

秋「え…あ。ご、ごめんね。ちょっとぼーっとしちゃって。」

慄「それならいいけど…大丈夫？」

秋「うん！私なら全然大丈夫！ほらほら、早く！..」

慄「おいおい…」

~~~~~

なんだかんだで学校も終わり、慄は秋のマンションの部屋の前に立っていた

慄「124号室…つと、ここか。」

ピンポン…

慄「出不いな…」

ピンポン…

慄「おかしい…」

ガチャ

慄「あ…あいてる」

慄「…千草？…」

「…く…ひっ…く」

慄「千…草…」

秋「り…つ…くん…？な…んで…」

慄「ばーか。」

そう言って軽く抱きしめた

慄「そういうお前こそ…なんで泣いてるんだよ」

秋「…聞いてくれる…？」

慄「ああ。」

秋「じつ…はね…」

秋「私の親ね。十年前…私が三歳のときに、交通事故で死んだの。

昨日みたいに晴れ渡った日だったっけ…家を三人で出た時。

昨日のあの交差点ではねられて…親は私を助け出した後、亡くなっってしまったの。

それに昨日泣いてた女の子。あの子…小さい頃の、写真で見た私と…瓜二つだった

思い出したわ…その日もあの子と似た服を着てた。同じように高い所でポニーテールしてね。」

慄「それで…」

秋「ごめんね。こんな顔…慄君に見せたくない」

慄「大丈夫だって！…親御さんは亡くなってしまったかもしれないけど。

いま、お前には俺がいる。庄がいる。椎野がいる。柚歩先輩がいる。由紀先輩がいる。

その他もろもろもいるっ！」

秋「ぷっ！」

慄「へ？」

秋「その他もろもろって…」

慄「…ま、いいや。とーにーかーく！おまえにはいつぱい仲間も味方もいるから。」

安心してればいいの！」

秋「…うん！」

ありがとう

慄君

Valentine days

秋「るん」

る「なに？えらく機嫌が良いじゃん」

秋「バレンタインチョコが上手く出来たから」

る「な〜んだ」

秋「なんだって何よ！」

る「だってさ。キスでも奪われたんならまだしも……」

秋「ぶっ！！」

る「！？」

秋「なっ、ななななに言ってるの！そ、そそんなわけ……」

る「何動揺してるの？もしや凶星？」

秋「ほんとにー？」

そう、明日はバレンタインデー。

チョコレートなんて久しぶりに作った。

友達や先輩には丸いトリュフチョコ。

そして慄君にだけ…ハート形のトリュフチョコ。

柚「る・い！あ・き！」

る・秋「うわああ！」

柚「なににも、そんな驚く事ないじゃない」

秋「だって…」

る「あ、そうだ。柚歩先輩は誰かにチョコ渡すんですか？」

秋「あ、それ私も気になります！」

柚「なっ…なな」

る「もしかして凶星とか!？」

柚「…わかったわ。言うわよ…私が…好きなのは…陣先輩…です」

る「はああああ!？」

秋「ええええ!？」

陣先輩とは…

るいの三つ上の兄。ただそれだけ。

る「あんな人のどこがいいんですか!!」

柚「あんなひとつて…」

秋「で、陣先輩にチヨコ渡すんですか？」

柚「え、ええ…」

次の日

秋「慄君！おはよ！」

慄「おう、おはよ。」

慄君はいつもよりそわそわしている。

周りの男子もそうだ。

男にとっては祭りみたいな日だから…

慄「な、なあ。」

女子の友達や先輩に配っている所に慄君が来た。

秋「ん？なに？」

慄「あのさ…」

秋「あ、チヨコ？ないよ。」

慄「えっ…」

慄君の背後のオーラがみるみる暗くなっていくのがわかった。

秋「ああ…もう！冗談よ。ちゃんと用意してるわよ！」

今度はオーラが明るくなっている

秋「ほら…」

慄君はとっても嬉しそうにしていた。

る「秋！」

秋「るい！庄君にちゃんと渡した？」

る「うん。まあね」

秋「よかったじゃん。…あ。袖歩先輩と…陣先輩！」

る「ちょっと行ってみよっか。」

秋「うん！」

秋「柚歩先輩！」
る「兄き〜！」

柚「お、ちゃんとチョコ渡した？」

秋「はい！…ところで、柚歩先輩は…」

柚「えへへ…じつは…」

陣「柚歩が俺の彼女になった。ただそれだけだよ」

る・秋「ええええ〜！！！」

る「な…兄きの彼女が先輩で…先輩の彼氏が兄きで…」

秋「おめでと〜うございます！」

柚「サンキュー」

HAPPY VALENTINE!!!!!!!!!!!!!!

朝の1コマ

次の日。

私達は部室までの廊下でたまたま会った。

慄「おはよー。」

秋「おはよ。きのうは…ありがと／＼／」

慄「ところでさ…もうそろそろ…返事、聞かせてほしいんだけど…」

秋「…／＼／」

慄「や、別に今じゃなくていいよ！…言えるようになったらいつでも言うって！」

秋「うん…ありがと。ごめんね…気持ちの整理つかなくて」

慄「ゆっくりでいいよ。それに…」

「このやり取りをこっそり聞いている人がいた。

ると庄君、それに事情を知った袖歩先輩と帆乃である。

袖「なにになに！？何かあの2人すっごくいい感じじゃない？」

帆「るいちちゃん達、この事知ってたの？」

る「う、うん…」

4人はこの光景を10?離れた所で見ていた。

しかし、何となく視線を感じていた秋は、急に立ち止まって振り返ってみた。

4人はこの秋の行動に驚き、慌てて近くにあった大きな柱の陰に隠れた。

しかし、安心するのはまだ早かった。

1番前にいた庄君に3人が体重をかけ、2人の様子を見ていた。

慄「どうしたの？」

秋「ううん…なんか見られているような気がする…」

慄「そういえば…」

その時。

3人の体重を1人で支えていた庄君がバランスを崩し、残りの3人も前に倒れこんだ。

慄・秋「ああっつ！」

秋「るい!庄君!帆乃ちゃん!それに…柚歩先輩まで!…」

る「あちゃっ…」

柚「ばれちゃったね…」

帆「ここはとりあえず…」

庄「にげるぞ〜!」

秋・慄「待て〜!」

この時は知るよしもなかった。
あんな事になるなんて

朝の1コマ(後書き)

こんにちは、NANAです。

後ろはギャグですね…

最後のは、ちょっとした次回予告です。

秋の身に何かが起こります…

ある雨の日

秋「今日は慄君、遅れてくるのかー!」

あの朝のドタバタがあった次の日。

今日はあいにくの雨。

もう発表も近いから、今日は大道具を作る事に。

私は1人、部室の隣の小部屋にこもり、大きな看板を作っていた。

今日は1日練習だが

同じグループの彼は午後からしか来ない。

だから1人で作っていた。

もう、板を組み合わせ終わり、後はペンキを塗るだけだった。

「ふう…あと一息。がんばろー!」

?「こんにちはー!あ、秋ちゃん!」

秋「ああ〜っ!!麻奈先輩!」

この人は風葉 麻奈先輩。

もう部活は引退してしまって、今は部活にたまに来る。

麻「看板作り？1人で？」

秋「はい…もう1人は遅刻です。」

麻「そつか。この部屋、いろんな物が山積みになってるの。ずっと前に1回地震があつて、いろんな物が崩れ落ちて。誰もいなかったからよかつたんだけどね…気をつけてね。」

秋「は、はい…」

麻「それじゃ、私は帰るわね。またね。」

1時間後

秋「ふう…やっと大体終わったわ。」

今は11時50分。

秋「早く終わらせよう。」

その時。

地震が学校を襲った。

麻奈先輩の言った通り

私の背後の荷物が崩れおちてしまった。

私はあえなく下敷きになった。

「慄…く…ん…」

そしてそのまま気を失ってしまった

~~~~~

慄「千草…?」

~~~~~

そのころ、部室では皆が集まっていた。けっこう大きな地震で、机の上の物が落ちたりして大変だったからである。

部長の由紀先輩が皆居るか確認する。

そこに丁度慄君が帰ってきた。

そこで秋が居ない事に気づいて、るいが声をあげた。

る「由紀先輩っ！秋が…秋が居ません！」

由「ええっ！たしかあの子は…隣の小部屋だわ！」

10分後。

秋はがれきの下から、柚歩先輩、由紀先輩や、るい、慄君達に発見された。

その時は気絶していて、少し怪我もしていた。

そしてさらに10分後。

秋が目を覚ました。

る「秋！！大丈夫なの！？」

秋「……？」

慄「なんで黙ってるんだ……？」

秋「『秋』が私の名前ですか……？」

柚「ど、どう……した……の……？」

秋「私は……誰ですか……？なぜ……私はここにいますか……？」

慄「うそ……だろ？」

秋は慄君を見ると虚ろな目で、ただこう言った。

秋「あなた……だれ……？」

場の空気が凍りついた。

記憶のカケラ

あれから1時間が経った。

秋の記憶は一向に戻らない。

柚「大丈夫か？」

秋「ええ…気分は良くなりました。」

由「どこからの記憶がないの？」

秋「もうほとんどの記憶が…」

由「そう…」

慄「俺のせいだっ…俺が遅刻なんてしなければ…俺が…」

帆「おちついて…そんな事言ったって、

記憶が戻る訳じゃないんだから。」

る「記憶を戻す方法を考えないと…」

秋「みなさん、本当にごめんなさい！どうしても…」

思い出せなくて…」

る「大丈夫！きっと記憶もどるから！」

秋「はい…」

柚「あゝっ、もう！『家庭の医学』とか置いてないの？」

帆「柚歩先輩、落ち着いてください！！」

柚「でも…でも…」

由「うゝん…あ！何か思い出深い物や人とかで思い出したりするのかも！」

庄「思い出深い人といえば…」

秋を除く全員が慄をみる。

慄「お、俺？」

庄「お前しかいねえだろ！！」

全員がうなづく。

慄はしばらく考え込んでから、

慄「わかった。」

庄「おまえにかかっているからな！！」

そして慄君を除く全員が部室から出て行った。

黒い記憶と赤い果実

外は相変わらず雨が降っている。

慄「ほんとに何も思い出せないのか…？」

秋「はい…ごめんなさい…」

慄「いやいや…そっか。」

秋「慄さん…ですよね。」

慄「慄君、でいいよ。」

秋「慄君…あの…私は…なんで記憶がないんでしょう…」

慄「…」

秋「…あ…ちょっとトイレにいった…き…ま…」

立った瞬間、秋は倒れてしまった。

慄「千草！…！」

抱きかかえると、ただ気絶しただけだと分った。

慄「でも、なんで気絶？」

小部屋で片づけをしている由紀先輩達の所に行ってみた。

慄「由紀先輩！！庄まで…一体…」

全員が気絶していた。体をゆすつても、起きる気配がない。

慄「なんで俺だけ無事なんだ？」

？「あなたに話があるからよ。」

慄「おまえ…だ…誰だ!？」

そこには小さな子供がいた。

子供、というよりは妖精、と言ったほうが早い。

？「私に驚いているようね。私はカシス。この世界の全ての
人々の記憶をつかさどる神。」

慄「で…なんなんだ、話つて。」

カ「実はね…この子、秋さんの事なんだけけれど。」

慄「…？」

カ「秋さんね…ただの人間じゃないのよ。この事はこの子も、
この家族にも知られていないわ。」

慄「ただの人間じゃ……ない……？」

外の雨音だけが力なく部屋に響いていた。

純粹・記憶・命

雨は強さをどんどん増していた。

慄「どういうことだ…?」

カ「実はね、秋さんの前世は私達と同じ神様だったのよ。

純粹の神様・アキ。…この子は生まれ変わっていても濃い血をひいていたの。

あの時折虚ろになる大きな目と寂しげな表情。漆黒の長い髪もアキにそっくりだわ。

今でも大きな影響を私達の世界に与える2人の人間の1人。

そしてさっき記憶を無くした原因。あれは地震のせいじゃなくて、本人も気づかないうちに秋さんの純粹さ、気高さが消失しそうになったから起きた

発作みたいなものね。本人は全て気づいていないみたいだけど。」

慄「治せるのか!？」

カ「ええ。ただ、材料は揃っているけれど…秋さんを想う強い気持ちが必要だわ。

あとね…救った人の大切な物を、代償として1つなくすわ。それでもいいかしら。」

慄「…俺の想いでもか?俺は命を懸けてもいい。千草を救い出した
いんだ!」

カ「…ええ、いいでしょう。このカシスの実を秋さんに飲ませてあげて。」

ただし、さっきも言った通り大切な物をあなたは1つ、なくすけれど。」

あ、そうだ。由紀さん達の気絶状態は、秋さんの記憶が戻ったら治る様にする。」

それじゃあ、私は元の世界に戻るわ。」

慄「あ…ちよつと待って！」

カ「なに？」

慄「なぜ…俺なんだ？」

カ「それは、この世界に来るまでの間に、あなたが秋さんを一番強く想っている」と

判断したから。それと…あなたの前世も神様だから。そうでしょう？
2人の内、もう1人の…影響を強く与える命の神、アルトさん？」

慄「え…」

カ「じゃ、帰るわね。いつかまたお会いしましょう。」

秋さん、幸せにしてあげてね。」

カシスが虹色の結晶を飲み込むと、薄くなつて最後は消えてしまった。

手の中のカシスだけが残った。

慄「俺が…千草を…助ける…」

土砂降りだった雨は小ぶりになり、黒い雲はまだ空を覆っていた。

覚 醒

慄「やるしかないな…」

秋の頭を膝に載せ、口の中にカシスを含むと飲ませた。

しかし…頬に赤みがさしてきたが、一向に戻る気配はない。

慄「くそ…っ…だめか…」

慄の目に涙が浮かんだ。

そして…秋の唇に落ちた。

秋「ん…慄…くん…？泣いて…るの…？」

慄「千草…？記憶が…戻ったのか！？」

秋「え…どういうこと！？」

？「これは…こういうことよ。」

慄「カ…カシス…！」

秋「だ…だれ？」

カ「あなた達に言い忘れた事があってね。あ、秋さん。

記憶が戻ったのね。私は記憶の神、カシス。

秋さん、あなたは記憶を無くしていたのよ。」

秋「え…記憶を…？」

カ「それと、由紀さん達が目を覚まさない理由。それは、

あなた達に神様の元に行ってほしいから。ほら、これを飲んで。」

カシスからあの虹色の結晶を受け取った。

それを飲むと、秋達も薄くなり、消えた。

碧い空

慄・秋「ここは…」

気がつくと、赤い絨毯が敷き詰められた部屋にいた。

慄「どこなんだ…ここは…」

秋「うーん…あ…！地球が見える！」

近くにあった窓からは地球が見えた。

慄「てことは…ここは…宇宙!？」

?「ようこそ、この世界へ…」

慄・秋「!？」

?「あ、そんなに驚かないでください。

私はテノーと申します。この世界・天界の
番人をしています。」

秋「天界!？」

テ「あなた方を神様がお待ちです。」

カ「さあ、行きましょ。」

~~~~~

さっきの広間を抜け、重たそうな扉をあけると  
中央に玉座に座った女の人があった。  
顔はベールで隠されていて見えない。

カ「ソラ様!!」

ソ「こんにちは、お二人とも…その姿で会うのは初めてですね。  
でも、今は再開を喜んでいる場合ではないのです。」

慄「え…?」

ソ「じつは…この世界には私がありますが、私とは正反対の  
魔王が居るのです。しかし、最近になって魔王が反乱を  
起こし始めているのです。」

秋「それを私達で止めると…?」

ソ「はい…あれを止められるのはあなた達しかいないのです。  
わたしは今までの戦いで力を殆ど使い果たしてきました。  
だから純粹と、命の力を持つあなた達しか…」

秋「純粹と…命…?」

慄「そうか…お前にはまだ話していなかったな。」

慄は全て話した。

秋の前世が純粹の神・アキである事。  
自分の前世が命の神・アルトである事。

そしてその事はここにいる人以外全員知らないという事まで。

秋「そうだったの…」

そして、しばらく考えてからこう言った。

秋「慄君。この世界を助けましょう!」

慄「え?」

秋「黙って見過ごすわけにはいかないもの。

それで良いでしょう?」

慄「ああ。」

ソ「本当ですか!?!ありがとうございます。」

ア「…慄さん。イ…いや、秋さん。」

秋・慄「…?」

この後、2人は本当の自分を知ることになる…。

## 碧い空（後書き）

こんにちは。NANAです。

最後のは…お分かりでしょう。次回予告です。  
ヒントは林檎ですよ〜（＾o＾）

## 永遠

イヴは樂園に生える禁断の赤い実を食べてしまいました。

怒った神はアダムと共に地上に追放してしまいました…

~~~~~

秋「あの…助けるのは良いんですが。さっき、

私達の名前、間違っ言おうとしてましたよね。…なんでですか？」

ソ「ああ…あなた方には、前世が神だった事は伝えましたが…
それよりも前の事は伝えていませんね…」

慄「それよりも…前…？」

ソ「ええ。…あなた達、アダムとイヴの話は知っていますか？」

慄「知っていますが…」

秋「私も。」

ソ「実は、その話、あなた達の知っている話では作り話が混じっています。」

本当は少し違うのです。そしてこの話はあなた達の過去に大いに関係あるんです。

まずはその説明からしなくてはいけませんね ……」

私は、昔は楽園に住んでいました。

1人だったので、“人間”を作ろうと思い、錬金術で人間を作り、『アダム』と名付けました。

そしてもう1人作ってみようと思いました。

アダムとは違う外見の、『イヴ』と名付けたのです。

私達は3人、幸せでした。

ところが、ある日…

イ「ソラ〜!!」

ソ「？」

イ「ごめんなさい、あの禁断の赤い実を食べてしまったの…」

ソ「え…？」

イ「ほんとにごめんなさい!!」

あの禁断の赤い実には、知識の力が詰まっていました。

このままでは、彼女に私とアダムやイヴは違う事がばれてしまう…
そうになると、もう二度と幸せな時間を3人で送れない…

心配は現実になり、彼女には知識がつかまりました。

私と、彼女とアダムは違うものだど認識しました。

イヴの後を追うようにアダムも赤い実を食べ、

自然に2人は愛し合うようになりました。

そして、3日後…

イ「私達、楽園を去ります。あなたを傷つけてまで一緒にいる事はできないわ。」

私も2人を見ていられなかった。

だから…2人を楽園から追放しました…

秋「へえ…」

慄「で…なんで俺らの過去に関係あるんだ？」

ソ「まだ気づきませんか？…慄さん…いえ、アダム。

そして秋さん…いえ、イヴ。」

秋・慄「え…ええ〜!!」

亜麻色の髪尊き瞳

秋「私が…イヴ？」

慄「俺がアダム…？」

ソ「あなたが覚えていないのも無理はありません。

ふつつ、前世の記憶は生まれ変わったと同時に消されますから。」

秋「でも…ありえないわ…」

ソ「あなた達の記憶はありませんが…」

その、慄さんの深い亜麻色の髪と、秋さんの真っ直ぐ貫くような澄んだ瞳は永遠です。」

秋・慄「…」

？「お前らがアダムとイヴの生まれ変わりか…？」

テ「誰だ！？」

？「忘れたのか？俺は魔王のリトだ…！」

ソ「なぜお前がここに来た！？」

リ「お前たちに宣戦布告をしに来ようとおもってな。」

慄・秋「…」

リ「明日の午後2時。天界と魔界の間の部屋で待っている。
なお、武器はどんなものでも使って良い事とする。…文句はない
な？」

ソ「…わかりました。あなた達もそれでいいですね？」

秋「はい…」

慄「俺も…」

リ「それでは、その時にまた会おう。さらばだ！」

そう言つて、魔王は消えてしまった。

部屋の中に、沈黙が訪れる。

最初を切り出したのは 秋だった。

秋「私に…戦わせてください。武器は…要りません。」

ソ「!？」

慄「おまえ…何言ってるんだ！相手は魔王だぞ？どんな手がかかっ
てくるかも分らないのに…」

カ「そうですよ！秋さん。慄さんの言つとおりですっ！」

テ「まあ、まあ皆さん。秋さんには秋さんなりの作戦があるんでし
よっ。

お2人とも、今日は体を休めて、明日に備えましょう。」

秋「はい…」

魔王の部屋

リ「ふっ…あんな娘を戦いに出すとは…あの娘には…」

指をならすと薬品がひとりでに調合され、人間の形になった。
そして、もう一度指をならすとその人形のようなものが光り、
ある人 になったのだ。
そしてその人に話しかけた。

リ「おまえは、明日、イヴを倒すために生まれてきたのだ。」

明日「イヴを倒すんだ。…分ったな？」

？「はい…仰せのままに…」

リ「これで俺の勝利は確実だ…」

…秋の対戦相手は

あまりにも秋が不利となるような相手だった…

戦い

午後2時…

天界と魔界の間の部屋

リ「ルールは簡単だ。どちらかが消滅するまで戦うまでだ。」

ソ「分かりました。こっちは秋が戦います。」

秋は、一応剣だけ持っていたが少し足が震えているのが分った。

慄（千草…）

リ「上出来だ。こちらは、彼女が戦う。入ってこい！！」
カーテンの向こうから現れたのは…

秋「る…い？」

そう、るいだっただ。

ソ「相手がるい…考えましたね、リト。」

リ「さあ、どうやって戦うのだ？心の優しいお前が友達を傷つけられるか？秋。」

秋「…」

秋は、黙って剣を床に置いた。

慄「千草…？」

秋「私は…戦いなんてしたくない。」

リ「な…」

秋「魔王さん。あなたは…何か原因があつてこんな戦いをしようとしてるんでしょ。だったら…っ…直 接話せばいいんじゃない…っ…なんで戦おうとするの…？」

秋の目からは自然に涙が落ちていた。

リ「俺は…ずっと孤独だったんだ。誰にも相手にされず、むしろ嫌われていた。」

「この気持ち、お前らにわからんだろう!!」

秋「私にはわかる。」

リ「な…」

秋「私、交通事故で親が死んだときね。」

「ずっと一人ぼっちだった。ホントに孤独だったもの。」

秋はその涙を袖でこすると、急に笑顔になった。

秋「るい…ごめんね。私はもう迷わない!」

るいの元へ、秋は走っていった。

そして…るいを抱きしめた。

秋「るい…ごめんね。私はずっとあなたに辛い思いさせてたんだね。」

私…幸せだから。庄君をとられたなんて思ってたないし、むしろ今の様になって感謝してる。」

「るいに感謝してる。…安心して。1人じゃないから。」

るいは驚いた顔をしていたが、涙をうつすら浮かべた笑顔になり、パンツという音と共に消えた。

るいが持っていた剣が残った。

その剣を、魔王に向かって投げた。

迷なんてちつともなかった。

ただ、るいを…大切な人を利用した事が許せなかった。

リ「くそっ…イヴ…許さんぞ…こつなつたらお前も道連れだ!」

魔王は、大きな波を投げつけてきた。

それは…秋に向かって…

当たると思った瞬間。

カシスが秋の身代わりとなって、その波に焼かれてしまった。

秋「カシス!」

命の代償

秋「カシス!!」

カシスは波の反動で吹き飛ばされた上に、
体中に火傷を負っていた。

秋「ばか…なんで私なんてかばったの!!」

カ「ごめんなさい、秋さん。ソラ様。

ソラ様…私は…実はもともと魔王の側近の天使でした。それと…
秋さん。

あなたの記憶をなくしたのも…私です…ごめんなさい…
慄さん。あなたの大切なものをなくすと言っていました…
あれは、秋さんの記憶喪失中の記憶です。」

ソ「…いいのです。あなたが、たとえ前に魔王の側近だったとして
も、

あなたは…この天界のれっきとした記憶の神なのです。」

秋「そうよ!それに…私、記憶を奪われたのかもしれないけれど…
でも…でもね、今はその事に感謝してるわ!あの事が無かったら…
カシスの事も、テノーさんやソラさん、魔王さん。そしてこの天
界っていう

素敵な世界も知らなかったと思うから。

カシス。ありがとう…」

カ「秋さん…ソラ様…」

リ「カシス…」

カ「リト様。私が…行きます。私も…一緒です。だから…
もう、さみしくなんかないでしょう?」

リ「カシス…ありが…と…う…」

そう言った瞬間、魔王が消えて行き…

そしてカシスも、涙を一筋落としながらゆっくりと目を閉じた。

永遠の眠りについたので。

今までで一番安らかな顔だった。

秋「カシス…!!いやあっ!目を開けて…っ!!」

慄「カシス…千草…」

慄はふいに秋を抱きしめた。

秋は泣いていた。

ソ「…カシスを救う手立ては…あります。」

甘酸っぱい木の実

ソ「…カシスを救う手立ては…あります。」

秋「…!？」

ソ「ここにいる全員は、前世が神だったりして力が強い人たちばかりです。」

「だから、生き返らせられなくても生まれ変わらせる事は可能です。」

慄「本当ですか？」

ソ「ええ。」

皆の口が緩む。

ソ「それでは、カシスの遺体を収容します。」

ふわっとカシスが浮かび上がり、霧の様になって消えてしまった。

秋（またね、カシス…）

ソ「それでは、あなた達を地上に送り届けます。」

慄「あ、はい。」

ソ「秋さん…あなたの事は天界からちゃんと見守っていますよ。」

秋「はい!!」

慄「(ムカッ)…秋には…俺がついてるから良いんだよっ!!」

秋「…慄くん…」

テ「…あら?いつの間にか“千草”から“秋”に変わってませんか?

慄「え!?!あ…いや…その…」

秋「(慄君…)あ…あのさ。秋でいいよ!」

慄「あ、ああ…じゃあ、俺も慄でいいよ。」

秋「うん!!」

テ「オホン!私達もいるのですが…」

秋・慄「あ…」

ソ「それでは、またお会いしましょう!!」

次第に霧に包まれると、秋と慄も消えて行った。

雪解け

秋「…あ！ここ…部屋に帰ってきた！！」

由「秋ちゃん！？慄君？なんでこんな所にいるの！？」

慄「…え？」

柚「なぜか2人がいなくなっていて、皆で探していたのよ！？」

2人が天界に旅立った後、皆も目を覚ましたらしい。

気がつけば2人がいなくなっていて、大慌てしたそうだ。

帰ってきて、皆で喜びあっている時に帆乃がある事に気付いた。

帆「…ねえ。秋ちゃんの記憶喪失なおつてない？」

る・柚・由・庄「ああ〜！！」

秋「や、実は、その時の記憶がないんだ…」

そう言い終えた瞬間。

部屋のドアが勢いよく開く。

？「こんにちは〜！！」

由「あら、亜美ちゃん？用事はもう終わったの？」

彼女は川瀬 亜美さん。

亜「いや、実は用事が早く終わりました。それよりも…！
じつは、この部活に入りたたって子がいます。」

帆「え！？誰ですか？」

亜「ほら、おいでよ！…！」

？「う、うん…！」

ちょっと恥ずかしそうに部室に入ってきたのは…

ブラウンの長い髪の毛。

カシス色の瞳。

笑うとかわいい笑顔を見せる…あの子だ。

秋・慄「カ…シス…？」

？「こんにちは。私は…秋野…莓といいます。よろしく願いします。」

自己紹介を終え、彼女は秋の隣に座った。

秋「あなた…カシスでしょう…？」

莓「あゝ、ばれちゃった。魔王様に許しをもらって、人間として生活しようと思って。」

秋「ふーん。」

莓「ま、これからもよろしくね。」

秋「…うん！」

s i d e 秋

ほんとは、最初シヨックだった。

庄君の事がずっと好きだったから、その分真実を知らされた時、シヨックは大きかった。

あの時泣いて、倒れてしまった

その時に初めて彼 慄君 の気持ちを知った。

「そして…俺の前に今、いる奴だよ」

この瞬間、戸惑いと驚きが交錯した。

それから…あの地震にあったとき。

私は覚えていないけれど、

るい達の話によると命懸けでも助けようとしてくれてたんだって。

少し嬉しかった。

そして、記憶がないことが残念だった。

カシスやテノーさん、ソラさん。天界という世界。

まるで、おとぎ話のような、不思議な時間だった。

私がイヴだなんて、いまだに信じられないんだけどね。

それに、天界を救ったっていうことも。

だけど…慄君が名前で呼んでくれて嬉しかった。

みんなに… アリガトウ…

s i d e る い

苦しかった。

秋をあんな形で苦しめていたのが辛かった。

私もひっそり庄君の事が気になっていたから、
告白された時は嬉しかった。

でも…秋が涙を流した時、やっと私は秋の気持ちに気づいてやれた。

私が気絶したとき。夢を見た。

秋がいた。

慄君がいた。

それと、妖精みたいな女の子と

天使みたいな格好の女の人と

顔をベールで隠した人がいた。

私は…剣を持っていた。

目の前には、やっぱり剣を持った秋。

あの子は震えている。

私は黒装束の人に「秋を倒せ」と言われた。

体の自由が利かない。

喋れない。

どうしようかと迷っていた。

秋が…剣を置いた。

涙を…流した。

なんで…？

秋…？

気づけば秋に抱かれていた。

「私は幸せだから」

ほんと？
…

自然に涙が出た。

秋を倒さずにすんだんだ。

よかった 本当に…よかった
…

秋。
アリガトウ

s i d e 慄

あいつを初めて見たときから好きだった。

でもあいつは庄が好きだった。

ある日

秋が部活の途中、いきなり倒れた。

たまたま近くを通りかかった俺は驚いて、
気がついたらあいつを抱き上げて保健室に連れて行っていた。

走っていたらローズのいいにおいがした。

心が安らぐにおいだった。

あいつが目を覚ますと、庄と椎野は戻って行った。

あいつらなりに、考えてくれたらしい。

2人きりになって

倒れた理由を聞いてみた。

秋は泣きだしてしまった。

理由を聞いた時、庄がもうどうしようもなくうつらやましかった。

そして 言うてしまった。 …

「そして…いま俺のまえにいる奴だよ…」
と。

秋のあの赤い顔は忘れられない。

あの雨の日。

あいつの記憶がなくなった時は目の前が真っ暗になった。

俺のせいだ

そう思っていた。

直後、カシスと出会って地震のせいでないか聞いて
すこしほっとした。

カシスからもらったカシスの実を飲ませてやったとき。
あいつは目を覚まさなくて…
涙がこぼれた。

あいつの唇に落ちた時。

あいつの目がゆっくりあいた。

「慄…く…ん？」

俺は涙を抑えることができなかった。

秋。

アリガトウ

皆。

アリガトウ

B R I D A L

あれから七年が経った六月のある日。

澄み渡った青空に鐘の音が響いた

~~~~~

そう。ここは結婚式場である。

そこにはあれから七年後のるい、帆乃ちゃん、庄君がいた。

る「なんか…すごいところだな」

るいはあの時と同じセミロングの髪に黒いワンピースを着ている

帆「ほんとだね…あの子もすごいことやるわ…」

帆乃ちゃんはすごい美人になっている。

淡い紫のフォーマルドレスを着ていた

庄「なあ、控室行かね？」

庄君は…そのまま。

じつは半年前にるいと結婚した。

る・帆「さんせい！！！」

柚「こらっ！！！」

る「きやあっ！！！」

柚「きゃあっ！」「って何よ」

る「だって」

柚「私は一応あなたの義姉なんだから」

る「はい」

陣「そっだそっだ！」

る「うわっ！兄貴」

帆「あ、はいはい、兄妹喧嘩始まる前に控室行きましょ！」

~~~~~

新郎控室

庄「よっ！慄！」

慄「お、おう。庄。」

慄は黒いタキシードを着ていた

陣「どうした？マリッジブルー的なあれか？」

慄「いや…そっいうわけじゃないんですけど」

庄「んじゃどっいうわけだよ、あ、彼女連れてきてやるっか？」

慄「ぶっ！…」

庄がそういった途端に飲んでたコーヒーを噴き出してしまった

庄「うわっ!」

陣「…ははくん、そりゃ綺麗になった彼女、見られないよな…?」

慄「ななな……………な」

庄「菜?」

陣「奈?」

慄「何言ってるんですか……………!!」

庄「うわっ…」

陣「慄が…噴火した…」

慄「もういい!」
「コーヒー買ってくる」

~~~~~

### 新婦控室

る「お邪魔しまーす!」

柚「なんかすごいな…」

帆「うわぁ…綺麗…!」



秋「…ありがとう！」

る「すごい！秋、すごい綺麗だよ！」

帆「さすが秋ちゃん…」

柚「ま、何はともあれ…おめでとう、秋！」

秋はほんのりピンク色のドレスを着て、  
シルクのヴェールを被っていた  
白いバラとマーガレットのブーケを持って…

秋「三人とも…来てくれたんだ…」

帆「おっと、涙を見せるのはまだはやいよ」

柚「そうそう、慄に花嫁姿見せてきなよ」

る「あいつだったら鼻血だしてぶっ倒れるよ、きつと」

秋「そんなわけ…」

帆「いいから、いいから。」

控室から出た時、丁度慄と鉢合わせになった。

秋「慄君…」

慄「秋…」

その瞬間。

ブツ…

慄が鼻血を出し、ぶっ倒れてしまった

る「あゝ！…やっぱり凶星！」

秋「そんなこと言ってる場合じゃないよー！慄君！」

ドクドクドク…

トキ　ハ　マ　タ

あれからまた更に五年が過ぎた、ある夏の日。

秋「あなた！行こ！」

24歳になった秋。腰まで降ろした髪がなびく。

腕には小さい女の子が抱かれていた。

慄「お、おう。」

彼は同じく24歳になった慄君。

亜麻色の髪は相変わらず。

今日は中学校の同窓会。

2人は3年前に結婚したのだ。

慄「莉季も大きくなったな。」

子供の名前は莉季。

5ヶ月になった。

秋「そりゃそうですね。あなたが仕事から帰ったら寝てるんだから。」

慄「それもそうだな。」

～同窓会・会場～

る「秋〜!」

秋「るい! 元気してた?」

る「うん! 秋の結婚式以来ね!

慄君! 秋を泣かせたりしてないでしょうね!」?

慄「そつ… そんな事してねえよ!」

る「ほんと〜? ま、それよりも。秋にも、もうこんな子供がいるのね〜。

かわいいじゃん。女の子。名前は?」

秋「えへへ… まあね。莉季っていうの。」

る「へえ。私にも、2年前に息子ができたんだけどね。」

秋「るいに! ? 名前は?」

る「流宇っていうの。今日は義母に預けたんだけど。

そつだ! 莉季ちゃんとうちの流宇、大きくなったら結婚させるのは! ?」

慄「え〜! ?」

る「なに、その妙な顔は。」

慄「い、いや… 別に…」

秋「私はいいよっ！」

慄「お、おい…」

庄「俺も!」

る「あなた!!いきなり話に入ってこないでよ!」

庄「ご、ごめんごめん。」

る「さあ、慄君。これでも反対できる?」

慄「う…わかったよ…」

る「じゃあ決定!」

帆「秋ちゃん〜!るいちゃん〜!」

秋・る「帆乃ちゃん!」

帆「元気してた?」

帆乃ちゃんはすらっとした美人になっていた。

る「きれいになったね〜!」

帆「いやいや…」

秋「旦那に幸せにしてもらってるっ」

帆「う、うん…」

皆しあわせそうだ。

でも

あの思い出だけは

今でも私と慄の胸に

莓の胸に

強く強く

刻まれているのです…

トキワマタ、ススム

END

トキハマタ(後書き)

やっとおわりました！

いままで読んでくださった方々。  
ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4415j/>

---

涙 と 恋 と

2010年10月8日23時08分発行